

震度に関する検討会（第2回） 議事概要

1. 日 時 平成21年1月20日（火）14:00～16:15

2. 場 所 グランドアーク半蔵門3階「光の間」

3. 出席者

翠川座長、青井、大川、桶田、神山、清野、瀬瀬、境、田中、谷原、中川、西山、正木、池内（代理 尾本）、飯島、長尾、増子、細見（代理 山際）、宇平、横田、熊谷の各委員

4. 検討事項

- (1) 地方公共団体設置の震度計の具体的な配置基準の検討
- (2) 「震度階級関連解説表」の見直し

5. 議事概要

事務局から、資料1により地方公共団体設置の震度計の具体的な配置基準の検討について、資料2により「震度階級関連解説表」の見直しについて説明、各委員にご議論いただいた。委員からの主な意見等は以下のとおり。なお、設置条件等の不適切な観測点の点検とその扱いについては、次回検討する。

<地方公共団体設置の震度計の具体的な配置基準の検討>

- 震度観測点は平成の大合併前の市区町村ごとに少なくとも1箇所は整備することなど、震度計の数については現状を維持する方向であり、基本的な方針は適切。
- 次世代震度情報ネットワークの整備方針に関連して、震度計の機能として、観測した地震波形データの確実な保存は重要。望まれる条件というより必須条件にすべき。

<「震度階級関連解説表」の見直し>

- 震度階級関連解説表は、誰が何のために活用するのか、利用の観点から記述内容を検討することが重要。
- 利用の観点で考えると、地震発生からの時間軸を踏まえて内容を検討することも重要。
- 解説表をどのような観点でまとめるかが鍵。地震直後は命を守るために知っておくべき事項が重要となる。その場合は、理解しやすい簡潔なものがよい。一方、地震への備えや地震発生後に生き延びるために知っておくべきこと等があり、それには多少詳しいものがよい。
- 詳細に書くと逆にポイントがぼやけてしまうおそれがある。冒頭に簡潔な概要を記載し次に詳細版がくるという構成がよいのではないか。
- 地震時に、自分がどれくらいの揺れの場所に居たのか即座に判断でき、各人が防災対応を行えるようにすることが重要である。解説表は、自分の場所の震度が推定できるくらいの資料としておく必要があるのではないか。

- 建物被害の様子を絵で説明するのは分かりやすい。木造の被害については「岡田・高井のパターン図」が適切。鉄筋コンクリート造の建物については日本建築学会の図が分かりやすいのではないか。
- 今回の資料では、コンクリート造の建物の被害が実際の事例より過度に書かれている。被害の例が少ないので、記述についても工夫が必要である。
- 岩手・宮城内陸地震の被害を見ると、地すべり・がけ崩れのほかに土石流が発生し、重大な被害を引き起こしている。地盤災害として、土石流災害の可能性について記述しておく必要があるのではないか。
- 解説表の項目間で記述の分量に差があると、記述の少ないところは重要でないとの誤解を生む。どの項目についても十分書く必要があるのでは。
- 地震被害によっては、震度に関連して表せないものがある。そのような事項について、地震発生時に注意すべき事項としてまとめ、記述するのがよいのではないか。
- 計測震度を科学的な基準と定義すると、人間の感じ方などは不変に近く、建物は耐震化が進むと被害が発生しないなど様相が異なってくる。このように、変わるものと変わらないものがあることが分かるような資料としておくことが重要ではないか。
- 地震時に、各防災機関や道路・鉄道機関などにおいて、震度を基準としてどのような防災対応を執ったり、通行や運行を止めたりしているのかなどについて概要的にも記載されていると分かりやすいのではないか。